

第200図 石器 (2) (1 : 2) 112 SZ03 (SD15)

木器

III期の木器がまとまって出土したのは、SD03の土器廃棄下層(56C区)及び東方の延長部(59F区)である。前者には木器と板材や自然木がある。第201図はその出土状態である。上段は梯子、下段は有頭棒及び板材。ほぼ溝底に接して出土した。後者からは、8・9と図示していない伐採斧の直柄(写真図版27-a)である。

ハシゴ 4は残存長104cmのハシゴ。足掛け用の段はすでに欠損しており、欠損部分から3段が復元できる。本来はさらに長かったであろう。

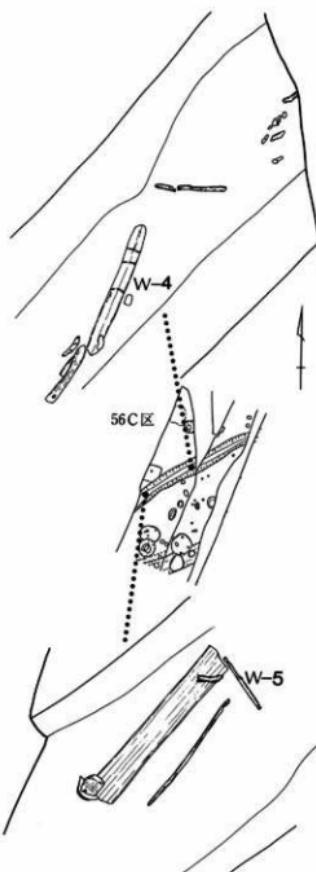
布巻き 5は長さ57cmの機織り具の一部、布巻き具か。

カイ状木器 6はSK01の底部に接して出土したスキあるいはカイ状の木器である。上部は欠損しているので続くようである。残存長50cm。未製品であろう。

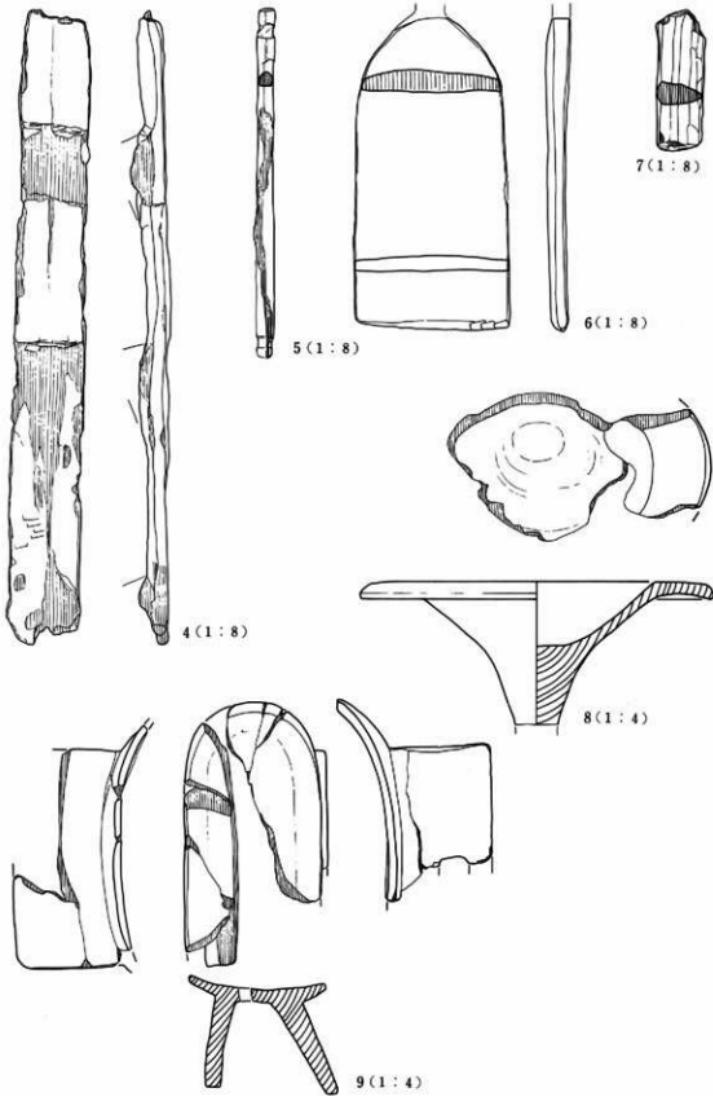
原材 7はSE01中層から出土した原材である。表面にはケズリ痕が観察できる。長さ22.4cm。

高杯 8は高杯の杯部である。表面に加工痕は観察できない。土器の高杯Wbと同じ形態である。杯部径は復元で29cm。

イス 9はイスか。天板の上面觀は小判形を呈し、残存長22cm、幅11.2cmで両端が上方に反る。天板下部には方形板が一本作りで付けられている。右の方形板には1辺5cmの不定形な孔が観察できる。おそらく両方に穿たれていたであろう。



第201図 SD03木器出土状態 (1:40)

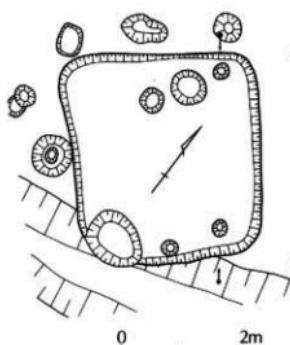


第202図 木器 4・5・8・9 SD03 6 SK01 7 SE01

IV 期

遺構

SB70
(図版18) SD19埋没後に床面が形成されている。プランは隅円方形で長軸340cm、短軸300cmを測る。掘形は深さ約10cm残存。柱穴は幾つか検出されているが特定できない。



第203図 SB70プランセクション (1:80)

緩やかな円弧をなす北半部と強く屈曲する南部からなる。上部が大きく削平されているため溝上面の規模は意味がない。溝の底面標高は北半部が平均-45cm、南部で-25cmを測る。最も高いのは屈曲部から北へ15mほどのところで0mを測る。

SD07は、一部土層セクション(59E区西壁)において再掘削の痕跡を確認したけれども、面的には追及できていない。全面的な再掘削であるかどうかは不明である。

埋土は、上層から I : 黄白色粘土層を含む幼生時代以降の自然堆積層①~③、II : 褐色砂質シルト層からなる土器群を含む堆積層④~⑥・⑧~⑪、III : 黄灰色や灰白色の微細な砂を縞状に含む暗褐色砂質シルト層⑦⑫となる。しかし、II層は北半部で検出していない。北端の Section 1 では I 層が標高 0m付近から堆積が始まっており、他の地区とは異なる。

SD17 L字状に屈曲する溝である。SD07と平行する部分では1条分岐(SD24)する。溝底面標高は調査区外壁土層セクションで+15cmであり、かなり浅くなっている。



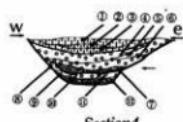
Section 1



Section 2



Section 3



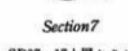
Section 4



Section 5



Section 6



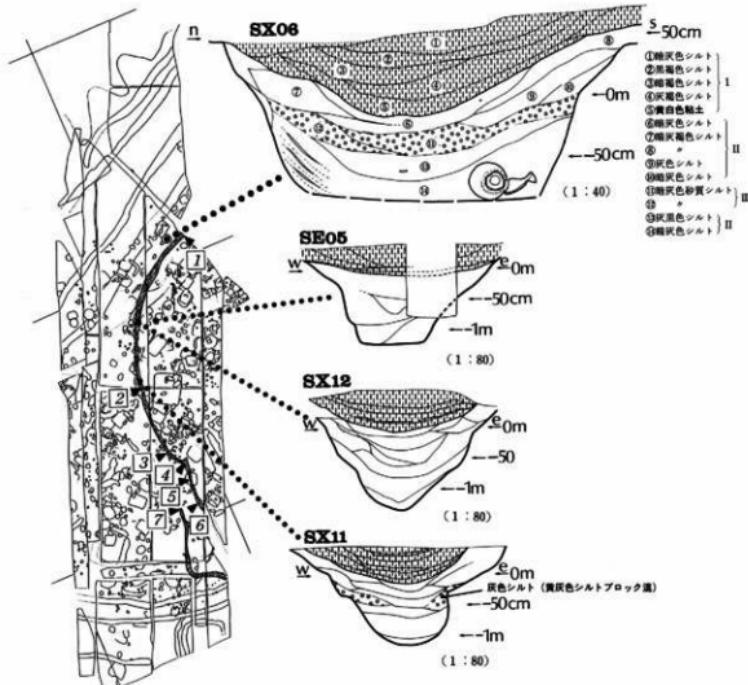
Section 7

第204図 SD07・17土層セクション
(第205図参照)

*矢印は、上が標高50cm、下が0mを示す。

※※ n:北 s:南 w:西 e:東

- S E 05** 上部は径約300cm、下部は径約100cm、深さ約100cmのすりばち状をなす。埋土上部は弥生時代以降の堆積層が覆っていた。
- S X 06** 径約340cm、深さ120cmの大形土坑。底面に接して土器が出土した。埋土は上層からI：黄白色粘土を含め弥生時代以降の堆積層、II：灰色を基調とするシルト層、III：暗灰色砂質シルト層、最下層はII層と同じだが灰白色の微細な砂からなる繊維状の薄い層を含む。
- S X 12** 径約280cm、深さ約180cmを測る底部の丸い土坑。SD07と重複している。土層セクションにはそれらしい輪郭が認められるものの確定できない。上部は弥生時代以降の堆積層が覆っている。
- S X 11** 上部の浅い皿状部分は径約370cm、下部は径約160cmで、深さは約160cmを測る。SD07と重複している。上下の境界部分には黄灰色シルトブロックを含む灰色シルトが堆積していた。壁面の崩土であろう。
- S K (土坑)** 土器の施業と炭化物を含む土坑を幾つか検出したが、いずれもSD07の内側である。

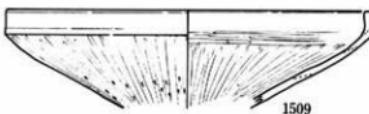


第205図 SD07・17土層セクション位置およびSE・SX土層セクション

遺 物

土器

S B70 1509は杯部が皿状を呈しIII期の高杯 Waに類似する。杯部は一部ケズリ痕を残すが、内外面とも研磨されている。口縁部はヨコナデされている。全体に薄手である。柱状の高い脚がつくのであろうか。



第206図 SB70出土土器

**S D07
(図版78・79)** 1461は小形壺。紋様は直線紋→波状紋→直線紋→扇形紋。
1462は高杯。口縁部に2条沈線後回転ヨコナデ。1463は高杯脚部。裾端部はヨコナデで凹面をなす。1464は高杯脚部。1462と同形か。裾端部は上方にはねる。

1465は蓋。

1466は台付受口状口縁甕。口縁部外面は櫛刺突紋。体部はハケメ工具直線紋と波状紋。脚台部裾端がやや内側につまみ出される。

1467~1470は高杯。1467は脚部上位に沈線が施され、中位でやや膨らむ。円孔も小さめで古い様相である。1469は櫛描直線紋間の波状紋がギザギザとなっている。1470は杯部が疑口縁で欠損している。1471は高杯。

1472~1474は台付鉢。1472は細かい研磨が施されている。1473・1474は外面にハケメを残す。口縁部はヨコナデされている。1475は鉢。

1476~1478は典型的な台付甕。口縁部はヨコナデされ、口唇部にハケメ工具圧痕を施す。脚台部は回転ヨコナデ。

1479は受口状口縁甕。口縁部外面には櫛刺突紋、体部は直線紋と波状紋の反復。波状紋は谷が尖る特徴的な形態。黄褐色。1489は台付小形壺。1481はIII期甕W混入。

1482は壺。口縁部内面に板による羽状圧痕紋。

S X06 1483~1487は壺。1483は、口縁部に回転ヨコナデ。1484は全面研磨。1485は、口唇部が上下に拡張され、口縁部内面には板で羽状圧痕紋が施されている。1486は、体部に直線紋

と波状紋の反復で最下段は扇形紋。1487は頸部に断面三角形突帯 2 条と突帯間に管状工具圧痕。体部は直線紋と斜走圧痕の反復。紋様部以下は研磨。

S X11 1488は口縁部内面に板の羽状圧痕紋と棒？による刺突紋 2 段。口唇部は若干上下に拡張され、円形浮紋が貼りつけられている。1489は口唇部に圧痕。口縁部内面には赤彩で何か描かれている。

S X09 1490は高杯脚部。

S X12 1491・1492は壺。1493は高杯 A。1491は口縁部がやや受口状気味をなし、内面に管状工具圧痕を施す。1492は口縁部内面に板による羽状圧痕紋。口唇部は沈線 3 条後回転ヨコナデ。1493は口唇部がやや外方に突出し、面を作る。

S X13 1494は赤彩蓋。

S X10 1495～1497・1499は壺。1498は甕。1495は細頸壺 Aa 磨消線紋系。混入。

1496は口縁部内面に板による羽状圧痕紋と棒？による刺突紋。口唇部は沈線 3 条後に回転ヨコナデ。1497は口縁部外側とも研磨。1499は口縁部内面に棒？による刺突紋。口唇部は回転ヨコナデで凹線を残す。体部は直線紋と波状紋の反復。

S K63 1500は台付甕。口縁部は回転ヨコナデ。口唇部はハケメ工具の圧痕。

S K132 1501は短頸壺。小さな貝による刺突紋と直線紋の反復。1502は鉢の底部か。沈線が 5 条ほどされている。

S K53 1503は長頸壺。紋様は口縁部に限定されている。外面は研磨。1504は体部外面に研磨が施されているようだ。

S K350 1505は口縁端部が若干水平に折れ、板による羽状圧痕紋が施される。

S K361 1506は無頸壺。体部外面はハケメをそのまま残す。

包含層 1507は受口状口縁甕。黄褐色。1479と同類。1508は皿状の杯部に柱状の長い脚部がつく高杯。裾部は強く外折し、端部は下部に粘土紐が付加されて上下に拡張される。

そ の 他

土製品

筒状土製品 1517は、Ⅰ期に類例のあった筒状土製品と形態的によく似ている。外画の紋様は、管状工具による円形圧痕列と磨消線の組み合わせである。

口側を上面として観察すると、筒状の体部は4分割されており、縦位に施された円形圧痕列でとぎれるかたちで磨消線が施されている。手法的には細頸壺の体部紋様と同じである。四分割された部分のうち1区画は格子状に縦位に磨消線が加えられている。口の反対側（下部）には円形圧痕が2つ施されている。時期は、細頸壺紋様との関係で言えば、Ⅲ-Ⅳ期に位置づけることが可能である。

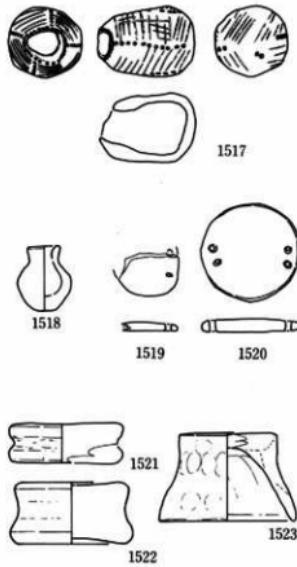
本例には鳥形土製品のような、横を正立して置くため（というよりは成形に関わる）底部は作り出されておらず、全体に丸みが残されている。系譜的に異なると考えられる。1518は壺のミニチュアである。

壺状土製品 1519・1520は壺の蓋かと思われるが素紋である。おそらく中期に属するであろう。これまでのところ、阿弥陀寺遺跡では壺蓋の出土例がない。壺の蓋があったとするなら、伝統的には木蓋？を使用していたのかもしれない。Ⅰ期に多い形態である。

盤状土製品 1521・1522は盤状土製品である。成形段階にはもう少し高さのあった円柱を仕上げの段階で上下から圧縮するように製作されている。そのためには、凹面が全周して滑車状をなす。

脚状土製品 1523は脚状土製品である。上下反転させれば鉢になる。これだけ高くなる例はⅢ期に下がるものではないだろうか。

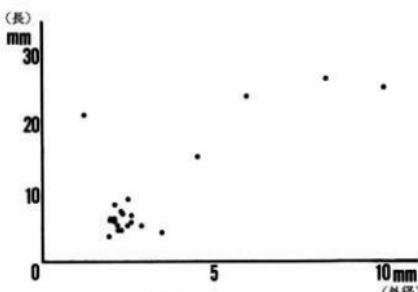
不明土製品 1524は器壁が非常に厚い鉢形土器で、一見未使用の器のつぼのようでもある。



第207図 土製品 (1:4)

石器

(図版81・82)



被身具

管玉は21点出土した。住居跡出土のものもあるが、時期区分に対応させて説明しなかったのでここで述べる。

第表のように長・外径で分布をみると、長さ10mm以下、径2.5mm付近に集中する部分がある。いわゆる細形管玉であるが、左上に飛び出た1点はさらに細くて長いといふ精巧品である。右上に伸びたグループは、大形品である。

石鎚

サスカイト製と思われるものがいくつかある。129～132がそうである。131は気泡を残した素材をそのまま利用している。側縁には細かい剝離が連続している。129・130は上下非対象で柳葉形とは異なる。129は基部の作りが雑である。130は側縁が湾曲せず直線的で菱形をなす。断面は下半部の方が厚い凸レンズ状をなすので基部と考えた。132は無基の三角形鎚である。側縁が直線的であることは、当方産と考えられるガラス質石英安山岩製の三角形鎚(136・137)とは異なる。

143はサスカイトだが、形態は五角形C類である。長さは5.7cmと長い。大きな剝片を得ることのできないガラス質石英安山岩では製作不可能な長さである。ガラス質石英安山岩の原石は写真図版25のj～mのような河原の転石を使用しており、大きくて拳大しかなく、しかも剝離が不安定では、こうした長い石鎚の製作は無理である。

伐採斧

149・150・152・153は刃部付近以外に研磨は施されておらず、成形時の剝離痕や敲打痕をそのまま残している。形態は150を除き頭部が小さくなってしまっており、とくに152は断面円形で非彌生的である。単純に太形蛤刃石斧とは言えない。

加工斧

151は抉入柱状石斧であるけれども、抉部は刃部側の段が明瞭であるものの、頭部側に段はない。全面研磨である。

叩き石

石材は石斧と同じなので転用かとも思われるが、研磨痕は全く観察できない。

刃器b

156は河原石の表皮を剥ぎ取った剝片に若干の整形を行っている。刃部には光沢が観察できる。掲載した他に4点ある。また、有肩扇状形を呈して身の厚い例も1点ある。いずれも表皮を残している。ただ、刃部は磨耗したものや敲打によるのか細かい剝離と潰れの観察できるものがある。

磨製尖頭器

155は先端部の破片である。包含層につき刺さって出土した。

その他

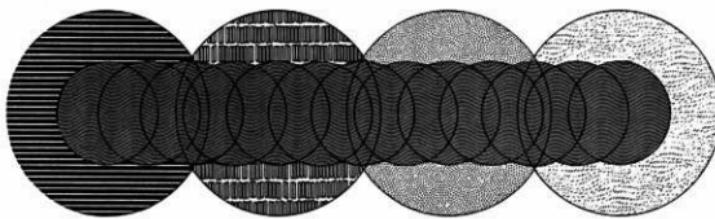
157は磨製穂摘具と同じ石材であるが、未製品であるかどうかは不明。刃部があるようである。

小結

遺構 弥生時代の遺構は、住居跡・土坑・溝などが検出できた。しかし、遺跡の遺存状況にも拘って、〈集落〉として良好な資料というのにはなお隔たりがあることは否めない。とくに残念なのは、I期の大形住居が、調査区の設定が関わっているとは言え、完全な状態で検出できなかったことである。大形住居の検出例は、当方では極めて希であり、集落内部の住居配置状態を知る上で、またその性格を考慮する上で、完全な検出が絶対条件であった。その意味で、大きな反省材料として銘記しておきたい。

弥生集落の構造を考える場合、管理施設としての「倉庫」の有無およびその配置が重要となってくるのであるけれども、今回確実に時期の決定できる「掘立柱建物」の検出が不十分であった。確実には1軒のみの提示に止どったが、「年報」で報告したものを含めて少なくとも4~5軒の存在は推定できた。しかし、時期が不確定であること、柱通りが悪いということで、今回報告するには至らなかった。もっとも、「倉庫」であるかの確定自体難しい問題ではあるが。

遺物 遺物は、人為物として土器・石器・木器があり、自然遺物として炭化米を始めとして植物種子がある。しかし、動物遺体は全く検出できていない。貝殻の破片らしきものは若干採取できたが貝層の形成はない。そうした遺物の絶体量が朝日遺跡・西志賀遺跡に比べて著しく少ないと起因するのであろう。その意味では、本遺跡のみからそうした状況についての結論を引き出すことは慎重であるべきといえる。周辺遺跡との相互関係のなかで議論すべき事柄としておきたい。



補足

阿弥陀寺遺跡では、弥生時代から鎌倉・室町時代の間にわたる遺物が幾つか出土している。今回はとくに報告することはなかった——「年報」では報告している——が、「元屋敷式」の新しい段階から、次の段階にかけての土器片が採取されている。遺構との関係は不明確であるけれども、遺物がある以上当該期の人間活動があったことはいちおう考慮しておきたい。

3 鎌倉・室町時代

A. 遺構

検出されたおもな遺構は、溝59条、井戸18基、掘立柱建物13棟、「大型土坑」3基、墓1基で、そのほかに土坑多数がある。遺構の重複は少ない。遺構の検出層位は微高地部分である南寄り3分の2ほどが現耕作土（畑）直下、北部の3分の1ほどが第二次世界大戦時の飛行場建設によって盛土された旧水田耕作土・床土直下である。これに対応するかのように、検出面の土質は、前者が灰褐色砂質シルトで、後者はシルト（所々に砂層が現を出す）となっている。殊に飛行場建設に伴う盛土中に弥生時代および鎌倉・室町時代の遺物が数多く包含されていることからみて、調査区周辺の微高地が大きく削平されている公算が高い。調査区域の南北の遺構が概して少ないのでこのことと関連する可能性がある。

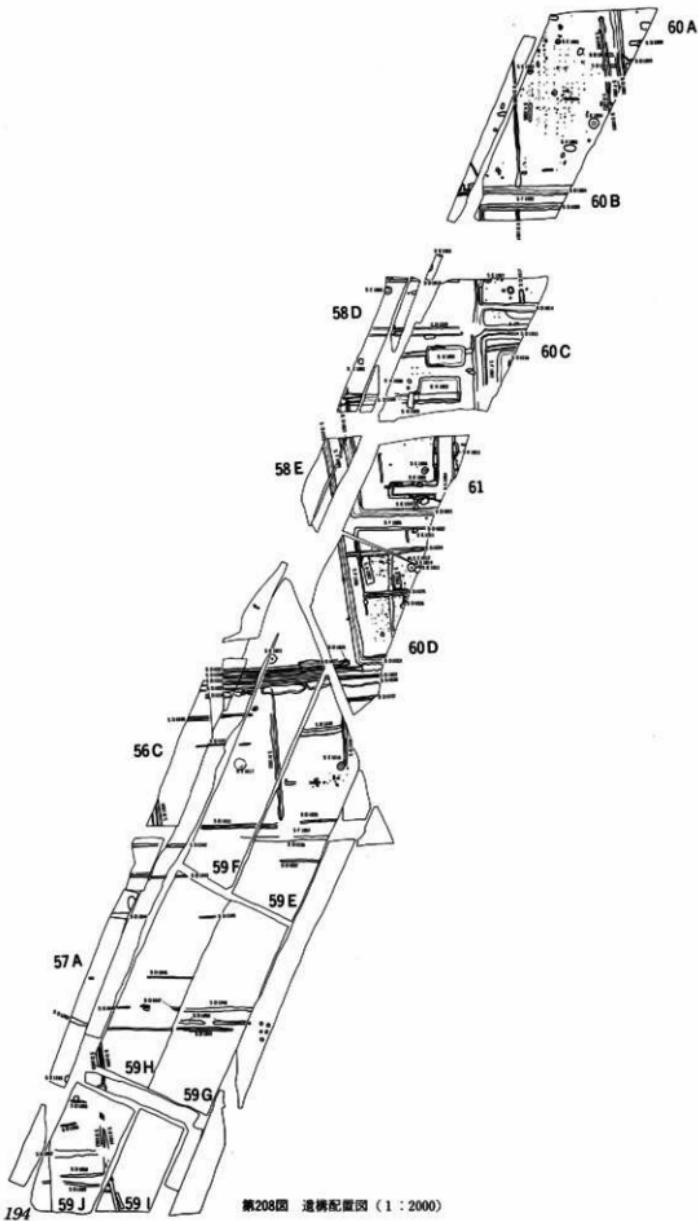
以下、まず主要な遺構について、溝、井戸、掘立柱建物、土坑の順でその調査所見を記し、ついで遺構の相互関係・年代について検討を加えることとする。なお遺構の規模に関する数値は全て検出規模である。

a. 溝 (SD)

溝は遺構の主体をなすもので、その規模等は多様であるが、いずれも「素掘り」で走行方位は大多數が真東西ないし幾分西に振った南北を示すという強い規則性を有している。また、遺跡の立地する低湿地帯では、人々の生活に際して用・排水等々の「水」の問題が重要であったであろうことは容易に想像されるところである。もとよりすべての溝（厳密には溝状遺構）が用・排水のためのものと断定すべきではないが、参考までに一部について水流方向についても検討を加え表示することとした。水流方向の判定については、溝底の高低差が有力な手掛りとなる。しかし現実の発掘調査では溝底は往々にして凹凸がみられ、さらには湧水・地山の「汚れ」等々でその確定には困難が伴うことが多い。したがって溝底の高低差が顕著な場合はとてもかくとして、微差のときには水流方向の確度が著しく低下することになる。この点をあらかじめことわっておきたい。

- SD1001 調査区域の北端近く、60A・B区を北から南へ流れる南北(N-5.5'-W)溝。上端幅310cm、深さ100cm、底面幅100cmで断面逆台形を呈すが西側斜面にはテラス状の段を有する。
（以下） 検出全長24m。SD1009・1010・1011がとりつぐが明確な切り合い関係は認められない。
- SD1002 調査区域の北端近く、60A・B区にある南北(N-5.5'-W)溝。SD1001の西を2.8mの間隔で平行している。調査区内で完結し全長は24.8mをはかる。上端幅170cm、深さ35cm、

3. 鎌倉・室町時代



第208図 遺構配置図 (1 : 2000)

底面幅70cmで断面は逆台形を呈す。S D1010・1011・1012がとりつくが、おそらくはS D1002の水量が増加した場合、このS D1010～1012を通りS D1001・(1003)へオーバーフローしたものと推察される。

S D1003 調査区域の北端近く(60B区)、S D1002の南延長上にある南北(N-5.5°-W)溝。検出長は3.0mにすぎず、水流方向は特定し難い。上端幅180cm、深さ60cm、底面幅100cmで断面は逆台形を呈す。北端にS D1012がとりつきS D1002へ続いている。

S D1004 調査区域の北部の60B区から59M区におよぶ東西(W-0.5°-S)溝。上端幅300cm、深さ45cm、底面幅180cmで断面は逆台形を呈す。検出全長は38m。底面は平坦で水流方向は不明。北側の掘形にS D1006がとりつくほか、西端近くで一部土坑に切られる。

S D1005 調査区域の北部の60B区にある。S D1004の南2.4mのところを東から28mほど平行したのち南へ直角に折れ3.8mで調査区外となる。東西部の走行方位は(W-1.0°-S)で、南北部は(N-0.5°-W)である。上端幅220cm～130cm、深さ60cm、底面幅40cmで、断面は開いたU字形を呈す。東西部に較べ南北部の上端幅は幅狭となる。南北部の南延長上には、若干ズレを有するもののS D1013(60C区)が存し、これに統く公算が高い。そのほか南側掘形にS D1007がとりつく。

S D1006 調査区域の北部(59M・60B区)にあって、S D1004の北側掘形に直角にとりつく南北(N-4°-W)溝。S D1002・1003とは30mへだてて平行関係にある。上端幅50～100cm、深さ10～40cmで断面は逆台形を呈す。検出全長は40mで、水流方向は特定できない。

S D1007 調査区域の北部(60B区)にある南北(N-4.0°-W)溝。S D1006の南延長上の位置で、S D1005の南側掘形に直角にとりつく。形状はS D1006に類似し、上端幅70～100cm、深さ20cmをはかる。検出全長は3.5mで、水流方向は特定出来ない。このS D1007の南延長上にS D1017(60C区)が位置しており、あるいは続いていたものかもしれない。

S D1008 調査区域の北端近く(60A区)にあって、S D1001東側にある東西(W-2.0°-S)溝。上端幅150cm、深さ20cm、底面幅130cmで検出長4.0m。

S D1009 調査区域の北端近く(60A区)にあって、S D1001の東側にとりつく東西(W-2.0°-S)溝。検出全長2.5mで、第二次世界大戦時の飛行場関連溝により一部埋されている。とりつき部は、北側掘形を突出させる形で幅狭となっている。上端幅200cm、深さ30cmほどと推察される。

S D1010 調査区域の北部(60A区)にあって、S D1001とS D1002とをつなぐと考えられる東西(W-2.0°-S)溝。S D1001とのとりつき部は上記飛行場関連溝により一部埋されているが、位置関係からみてS D1001にとりつく蓋然性が高い。全長250cm、上端幅100cm、深さ20cmで断面は逆台形を呈す。

S D1011 調査区域の北部(60A区)にあって、S D1011同様にS D1001とS D1002とをつなぐ東西(W-1.0°-S)溝。S D1010の南3.0mに位置する。全長250cm、上端幅80cm、深さ10cmで断面は逆半弧を呈す。

S D1012 調査区域の北部(60B区)にあって、S D1002とS D1003とをつなぐ南北(N-3.0°-W)

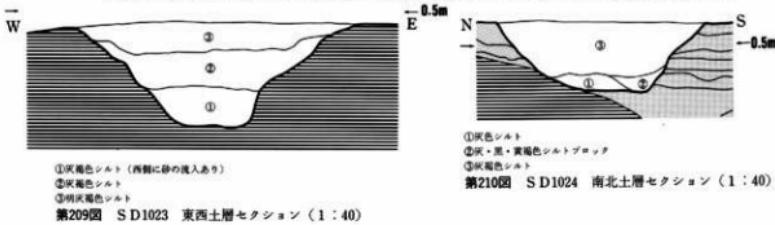
- 溝。上端幅60cm、深さ20cmで断面U字形を呈す。全長は3.5m。
- S D1013** 調査区域北部(60C区)にある南北(N-3.5'-W)溝。上端幅は300cmほどであるが、
 (以下)
 北壁近く、S E1007の西部分をのぞいて、東側掘形が緩く傾斜し、幅100cmほどとなる。深さ50cm、底面幅は50~150cmである。南半分はS D1014の南北部と切り合い関係にあって、S D1014の南北部東側を埋め立てて幅狭としS D1013としている。検出全長は14.5mである。南端部がごく最近の搅乱によって壊されているが、おそらくはS D1015にとりついでいたものと推察される。
- S D1014** 調査区域の北部(60C区)の北東部を東から西方へ(W-0.5'-S)17.5m直行したのち、ほぼ直角に南折(N-1.0'-W)し5.3mほどでS D1015に交差する溝。S D1015との関係は、搅乱により定かにし得ない。掘形東側が幾分開きあたかも同時存在の感があるが、埋土状況が幾分異なりS D1015に先行する可能性がある。上端幅250~350cm、深さ30~50cm、底面幅150cmで断面は逆台形を呈す。曲折部が最も幅狭となっている。廃絶後埋め立てられ、南北部にはS D1013が走る。
- S D1015** 調査区域の北部(60C区)の東壁より西方へ14m直行(W-2.0'-S)したのち直角に南折し(N-4.0'-W)24mほどで調査区外となる溝。東西部はS D1014の東西部と45mの間隔で平行する。上端幅450cm、深さ100cm、底面幅150cmで、掘形は深さ40cmほどのところで積を有して垂直に近い急斜面となって底面にいたる。水流方向については、底面での湧水がはげしく不明瞭である。埋土は最下層部に薄い砂層が幾層か入るほかシルトを基調とするものである。遺物の出土量は多く、殊に東西部で土器(小皿)が多量出土した。
- S D1016** 調査区域の北部(60C区)の東南部にある溝。上記S D1015とは4.0mほどの間隔ではば平行する。検出部は少ないが北・西掘形の総長14m。幅400cm、深さ30cm、底面幅230cmで断面は逆台形を呈す。水流方向は不明。
- S D1017** 調査区域の北部(60C区)にあって、S D1017の北掘形に直角にとりつく南北(N-4.0'-W)溝。上端幅130cm、深さ20cm、断面は逆半円弧を呈す。地山が砂層であり水流方向は不明。なお、このS D1017の北延長上にS D1007が存し両者の位置関係が注目される。
- S D1018** 調査区域の北部(60C、59L、58D区)の北壁沿いにある東西(W-0.5'-S)溝。上端幅90cm、深さ25cmで断面は逆台形を呈す。検出総長は26m。58D区の北端近くで2条の溝(?)がとりつく。
- S D1019** 調査区域の北部(60C区)のほぼ中央に東端部が位置し、59L・58Dにかけて検出された東西(W-2.5'-S)溝。上端幅270cm、深さ30cm、底面幅200cmで断面は逆台形を呈す。底面は平坦で水流方向は不明。検出総長は30mで、東端より9mのところの南掘形に長さ300cm、幅120cmのテラスがとりつくほか、20m地点が一部土坑により切られている。埋土はシルトを基調とするもので、両掘形近くには地山ブロックが多々みられる。なお北側の掘形ラインの東延長上にS D1015の北側掘形となる。
- S D1020** 調査区域の北部、60C区の南端中央に東端部が位置し、59L・58D区にかけて検出された東西(W-2.5'-S)溝。上端幅2.8m、深さ0.6mで断面は逆台形を呈す。ただ、58D区の

所見¹⁰⁾では「新旧二本の溝が重複」し「上部溝の検出面」で幅130cm、深さ30cmのもう一本の溝が存する。検出全長は40m。東端部が大型土坑S K1003によって切られ、そのすぐ西がS K1008によって切られている。また検出部西端では「上部の溝はS D03—S D1021—を切り、下部の溝はS D03—S D1021—と同時期に存する」とする。

S D1021 調査の中央やや北寄り、58D区から58E・59K区をとおり61調査区の中央で東に折れ調(以下、図版100) 査区外へとつななる溝。南北(N—8.0°—W)部の総長は一部調査区外をふくめ40.8m、東西(W—2.0°—S)部の総長24.4mをはかる。上端幅は南北部で430cm前後、東西部で240cm、深さはともに100cm前後をはかり、底面幅は南北部200cm、東西部100cmである。断面形は南北部では両掘形にテラス状の段が存する逆台形を呈し、東西部は逆台形を呈す。東西部の埋土の状況は一度掘り直し(単なる「溝掃除」の結果?)が行なわれたことを示している。

S D1022 調査区域の中央やや北寄り、60D区の南部から60C区北部にかけて検出された溝。上記S D1021の南4.0mのところを東西に24mにわたり平行したのち直角に(S D1021とは180°逆方向)折れ南北方向に20.8mづいて終息する。東西(W—3.0°—S)部は上端幅100cm、深さ40cm、南北(N—8.5°—W)部は北から12mほどが上端幅130cm、深さ40cmをはかり以南は序々に幅狭となる。深さは12m地点で約20cmをはかるがすぐに段を有して浅くなりやがて消滅する。南北部はS D1023と平行し、南延長上にS D1025の南北部が存す。他の遺構との切り合い関係については、東西部では曲折部の東8.0m地点の南掘形に長さ2.2mの小溝がとりつくほか、9.6m地点でS E11を切っている。南北部では曲折部の南4.0mのところでS D1024と切り合う。ただし東掘形での観察では明らかにS D1024を切っているのに対し、西掘形では切り合い関係ではなくS D1024がとりつく状況を示していた。したがって当初S D1024が存し、後にこのS D1022が削除された際に埋立てずに後述のS D1023とつなぐためにそのままこの部分を残したと解しておきたい。なお東西部では中央あたりに多量の遺物の出土をみた。

S D1023 調査区域の中央北寄りで、59Eから59K区をとおり60D区にかけて検出された溝。59E・59Kでは上記S D1021の西20mのところを南北(N—9.0°—W)に平行し、60D区では同じ上記S D1022およびS D1025の南北部と2.0mの間隔で平行しさらに南進したのち東方へ折れ、4.0mの東西(W—2.5°—S)部を有したのち調査区外となる。一部推定をふくめ南北部長36m、東西部長4.0mをはかる。上端幅220cm、深さ80cm、底面幅70cmで断面は逆台形を呈す。水流方向は北から南、西から東である。なお南北部のはば中央東側掘形にS D



第209図 S D1023 東西土層セクション (1:40)

1024がとりつくほか、東西部で S D1031により切られる。

S D1024 調査区域の中央やや北寄り、60C・61調査区にある東西(W-4.5'-S)溝。S D1022の南6.0mの東壁から西方へ延び上記S D1023へとにつく。検出長は26mをはかる。東から22mのところで上端幅160cm、深さ60cm、底面幅80cmをはかり断面は逆台形を呈す。S D1022により切られるが、切り合関係からみてそれ以西の部分は、S D1022とS D1023とつなぐ溝としてそのまま利用されたものと推察される。

S D1025 調査区域の中央やや北寄り、60D区北東部の東壁近くよりはじまり西方へ14m直行したのも直角に南折し6.5mで終息する溝。東西(W-4.0'-S)部は、上端幅60~100cm、深さ20~50mで、南北(N-6.0'-E)部は上端幅50cm、深さ20cmをはかり、断面形はともに逆台形を呈す。東西部は方向と同じくするS D1026により切られ、南北部では径140cm前後、深さ50cmの土坑と重複するが埋土が酷似し切り合関係を明確にすることはできない。あるいは同時存在か。

S D1027 ~ S D1031 調査区域のほぼ中央を東西に走る溝群。切り合関係を整理すると下記の如くである。

S D1027 → S D1028
S D1029 → S D1030

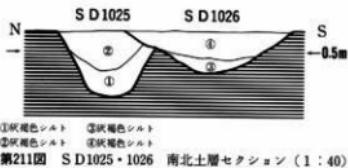
S D1027は60D区と59F区にまたがって検出された東西(W-8.0'-S)溝。検出長は16m。上端幅140cm、深さ40cmで断面は逆半円弧を呈する。

S D1028は60D区から59F・59A・56A区にかけて42mにわたり検出された東西(W-4.0'-S)溝。東端幅はS D1027とほぼ同じ位置にあたる。上端幅60~100cm、深さ40cmで断面は逆半円弧を呈する。

S D1029は60D区から56F・59A・56A・56C区にかけて検出された東西(W-4.5'-S)溝。検出全長は58m。上端幅は90~200cmと西方へ移るにつれて幅広となる。深さは30~60cmで断面は逆台形を呈する。

S D1030は、60D区から56E・59F・59A・56A・56C区におよぶ東西(W-4.0'-S)溝。検出面でのプランは、不整形の長円形が東西方向に一列に並んだもので、本来は一つの溝の公算が高い。60D区での上端幅は30cm、深さ30cm、底面幅160cmをはかり、断面は逆台形を呈する。

S D1031は、60D区から56E・56F・59A・56C区におよぶ東西(W-3.5'-S)溝。層位的にみてこの溝は、第二次世界大戦時の飛行場建設前より存し、今回の発掘調査の契機となった環状2号線(一般国道302号)建設の用地買収時まで機能していたことが知られるものである。溝の南側掘形には「道」が、北側には水田に伴なう畦が接する。幅300m、深さ100cmほどである。この報文では、飛行場建設前の水田跡に伴なう水路・溝については「攪乱」扱いをしているが、このS D1031については、当地の条里制地割⁽⁷⁾を検討する際に



しばしば用いられる土地宝典に記され、「坪界」として取り上げられるという溝であるがゆえにあえて造構として記載することとした。

S D 1032 調査区域のはば中央(60D区)の南端にある東西(W-5.5'-S)溝。上端幅100cm、深さ40cmで断面逆台形を呈す。検出長は10mで、この西延長の59E区北部ではつづきは認められない。ただ59E区の南北溝S D 1039の北延長上がS D 1032のはば西端にあたることからして、このS D 1032はほぼ直角に南折しS D 1039につづく公算が大である。溝の形態も類似する。

S D 1033 調査区域の中央やや南寄り、59E・F区で検出された溝。上記S D 1030のはば中央より(以下
〔図版101〕)44m南へ直行したちはば直角に西折(無密にはコーナー部に擾乱が存するのであるがその形状埋土からみて連続することは間違いない)し26mほど西進して調査区外となる。南北(N-6.0'-W)部は上端幅180cm、深さ60cm、底面幅40cmをはかり、東西(W-4'-S)部は上端幅120cm、深さ60cm、底面幅40cmをはかる。断面はともに逆台形を呈す。

S D 1034 調査区域の中央やや南寄り、56C区の南端近くにある南北(N-7'-W)溝。検出長8.0mで、上端幅150cm、深さ50cm、底面幅70cmをはかる。断面は逆台形を呈し、その形状はS D 1033に類似する。ただしS D 1033の西延長上の59B区において未検出である点からして連続することは考え難い。なお、このS D 1034の西側1.0mを隔てて平行する溝の掘形らしきものが存する。

S D 1035 調査区域の中央やや南寄り、59E区にある東西(W-3.0'-S)溝。S D 1033の東西部の擾乱をはさんだ東延長上にある。ただ上端幅60cm、深さ10cmとその規模が異なる。検出長は12m。

S D 1036 調査区域の中央やや南寄り、59E・F区にわたって検出された東西(W-3.0'-S)溝。上記S D 1035およびS D 1033と4.8m、32mの間隔で略平行する。上端幅120cmで、北側掘形にそった幅40cmが一段深くなり深さ50cmをはかる。検出長は28.8mで西行するにつれて浅くなり終息する。

S D 1037 調査区域の中央やや南寄り、59E区にあって上記S D 1036の南6.4mを平行する東西(W-2.0'-S)溝。幾分北側に張って緩い円弧を呈す。上端幅60cm、深さ10cmで断面は逆台形を呈す。59E区の東壁より12.4mで西端となる。東端については調査区外となるが、東隣の57H区ではその延長は認められない。

S D 1038 調査区域の中央南寄り、59E区にあってS D 1030の南13.2mを並走する東西(W-5.0'-S)溝。検出全長12.0mで東端はS D 1039によって切られ、西端は調査区外となるが、西隣の59F区では延長はみられない。上端幅240cmで北側掘形に



第212図 S D 1038・1039 (北から)

そった幅80cmが一段深くなり深さ20cmをはかる。S D1036と形状は類似するが一段と規模は大きい。

- S D1039** 調査区域の中央南寄り、59E区の北部にある南北（N-2.0'-W）溝。検出長は16mで、
 (以下)
 (図版102) 南端はS E1015の東隣で終息し、北端については調査区外となるが、さらに4.8m北進し直角に東折し60D区のS D1032につながる公算が高い。上端幅130cm、深さ50cmで断面は逆台形を呈す。
- S D1040** 調査区域の中央南寄り、S D1030の南9mのところを59F・59A・56C区にかけて並走する東西（W-6.0'-S）溝。59F区西壁近くを東端とし検出全長22mである。上端幅80~140cm、深さ40cmで断面は逆台形を呈す。
- S D1041** 調査区域の中央南寄り、上記S D1040の南8.4mのところを18mにわたり並走する東西（W-3.0'-S）溝。東端はS D1040とはぼ揃う。上端幅40cm、深さ10cmで断面は逆台形を呈す。一部削平等により途切れる箇所がある。
- S D1042** 調査区域の中央やや南寄り、56D区の北端から59B区北端にかけて検出された東西（W-2.0'-S）溝。上端幅90cm、深さ50cmで断面は逆台形を呈す。検出長18mで西端・東端とも調査区外となるが東端の東延長上にあたる59F区ではつづきは認められない。
- S D1043** 調査区域の中央やや南寄り、上記S D1043の南9mほどのところを並走する東西(W-4.0'-S)溝。上端幅50cm、深さ20cmで断面逆台形の小規模な溝。検出長19.5mで両端とも調査区外となる。
- S D1044** 調査区域の中央やや南寄り、57A区の北端近くで検出された東西(W-2.0'-S)溝。上
 (以下)
 (図版103) 端幅120cm~300cm、深さ20cmで断面は逆台形を呈す。検出長6.0mで東・西端とも調査区外となる。
- S D1045** 調査区域の中央やや南寄り、59H区の北東部で検出された東西(W-2.0'-S)溝。検出長5.5m、上端幅50cm、深さ10cmで断面逆台形の小規模な溝。
- S D1046** 調査区域南部の北寄り、59H区の中央で15.5mにわたり検出された東西(W-2.0'-S)溝。上端幅30cm、深さ10cmで断面は逆台形を呈す。西延長上の57A区で検出された長さ1.6mの東西溝は一連のものの公算が大である。
- S D1047** 調査区域南部の北寄り59H区で検出された幾分蛇行する東西(W-1.0'-S)溝。上端幅40cm、深さ20cmで断面は浅いU字形を呈す。検出長は13.6mであるが途中6.4mほどが削平等で途切れる。西延長上に東西溝のS D1049が存す。あるいは一連のものかも知れない。
- S D1048** 調査区域南部の北寄り、59H区にある上記S D1047に接し東隣の59G区へ延びる東西(W-1.0'-S)溝。上端幅120cm、深さ30cmで断面は逆台形を呈す。西部の一部が途切れるが検出長は36m。東端は調査区外となり、東隣の57H区ではつづきは認められない。
- S D1049** 調査区域南部の北寄り、59H区にあって上記S D1047の西延長上にある東西(W-3.0'-S)溝。検出長は4.5m上端幅30cm、深さ10cmで断面は逆台形を呈す。
- S D1050** 調査区域南部の北寄り、59G区および57H区にあって上記S D1048南3mのところを並走する一列に並んだ2つの東西(W-2.0'-S)溝。ともに上端幅120cm、深さ10cmで断面